

「天草版伊曾保物語」の語彙と語法

池田悦子

一、はじめに

十六世紀に來日したイエズス会の宣教師たちは布教のため、日本語を熱心に学んだ。印刷物を出し、布教の手段にするとともに、自分たちの日本語学習にも使った。それらのテキストの一冊に、「イソポのフアプラス」がある。イソップ物語の初めての和訳であり、一五九三年に天草で刊行されたので、「天草版伊曾保物語」と呼ばれている。キリシタン版は、当時の日本語発音がローマ字で書かれていることから、室町時代の口語を知る上で貴重な資料となっているのである。

天草版伊曾保物語は、国字本との関係も見過ごすことはできない。両者を比較してみると、イソポ伝において話の順序が前後しており、文章の違う所がある。また、国字本にあって、天草版にない話も存在する。寓話においては天草版七〇話、国字本六四話、共通の話二五話というように、

いっそう差が著しい。新村出氏、土井忠生氏、柊源一氏の研究によると両者に共通の祖本として、文語訳の広本が存在したのではないかと言われている。また、この時代は、古代語から近代語へと日本語が大きく変化する時代でもあることから、ここでは、音便や連体形の終止形化などの語法や語彙を通して、この作品にどのような変化が見られるかを考察していくことにする。

二、動詞の音便形について

古来日本語には母音の並列を許さないきまりがあった。それが平安時代に入って、母音だけの音節が語中にくるといふ音便が発生した。この音便の発生した原因として一般に言われている事は、単音の脱落現象である。イ音便やウ音便は「高ウ」「書イテ」などのように、子音の「 h 」や「 s 」の脱落によるもので、促音便や撥音便は「死ンデ」「読ンデ」「持ッテ」などに見られる母音「 i 」の脱落に

よるものである。つまり、子音の〈k〉〈s〉や母音の〈i〉などの響度の弱い音が脱落しやすいと言える。しかし、この時期には物語などにイ音便やウ音便があらわれても、促音便や撥音便はめつたにあらわれない。これは、イ音便やウ音便が穏やかな音になるのに対して、促音便や撥音便が強さを感じる音であることから、優雅さを重んじた当時の女性にはイ音便やウ音便の方が喜ばれたためであると思われる。しかし、音便形は和歌の詞書に使われても、和歌自体には使用されなかった。それは音便形があくまでも口語での使用であり、和歌の言葉としては品格が劣ると考えられていたためであると思われる。また、種類によってそのあらわれ方に違いがあり、ガ行四段のイ音便「騒いで」やバ行四段の撥音便「呼んで」、ラ行四段の促音便「取って」など、まだまれにしか見られないものもある。

さて、十一世紀末から十七世紀の初めまでの約五〇〇年間を中世といい、国語史の中でも変化の激しい時期であったことはよく知られていることである。この時期の音便は、前代と同じく四種類であるが、そのあらわれる条件などに変化が出てきた。まず、イ音便であるが、主にカ・ガ・サ行四段動詞の連用形から「て・た」に続くようになる。ウ音便は、前代と同様にハ行四段動詞の連用形にあらわれている。促音便は、この時期になって、初期の説話集や戦記

物などにおいて盛んに使われている。促音便はタ・ハ・ラ行四段、ラ変動詞の連用形にあらわれたが、ハ行四段動詞に限っては、まだウ音便形になる方が普通であったようである。最後に撥音便は、バ・マ行四段とナ変動詞の連用形にあらわれるが、バ行四段動詞の「呼んで」「飛んで」などは鎌倉期から多くなっている。また、バ・マ行の撥音便は後期になって、「呼うで」「頼うだ」のように才段の長音になったため、ウ音便と同じになった。しかし、文献には同じ語が両形あらわれている例も見られる。こうして、この時代の後期になると、音便形が連用形と並ぶ一つの活用形のようになり、使用度数も増えていく。

それでは四段活用が音便を起こしやすいのはなぜだろうか。柳田征司氏の研究によると、従来厳しい別があったのではなく、四段活用が音便を起こやすく、上二段活用が音便を起こしにくいという傾向があったようである。四段活用である「置く・織る」、下二段活用である「起く・降る」のように両形が音便を起こすと衝突する語があった。しかし、このことのみで四段活用が音便しやすいという理由にはならない。ここで「掻き」の例を挙げて考えてみることにする。〈k a k i〉の〈k〉は軟口蓋音である。〈i〉は前舌母音なので発音する場合の労力が大きいため、〈k〉の脱落が生じる。これがいわゆる音便であるが、ここで言

えることは語幹末母音が、へaのようになり広い母音である
 ほど、音便は起きやすいのではないかとということである。

四段活用の語幹末母音はバ行を除くと、どの行も語幹末母音がへaである動詞が多くなっている。逆に上二段活用はバ・マ行を除くと語幹末母音がへaである動詞は一例あるかないかである。つまり、広い母音を持つ四段活用が早くから音便を発生させていたということになる。さらにバ・マ行で語幹末母音が広い母音である上二段活用が四段活用に転じている語もある。語幹末母音がへaである語として、「スサブ(弄)・マナブ(学)」などがあり、へoである語としては、「ウトブ(疎)・ヨロコブ(喜)」などがある。この他に母音へiである「アヤシム(づ)」のように四段活用になっている語も見られる。これは撥音便の時にはへmが独立し得るため、狭い母音の場合でも音便が起きたからであると考えられている。このように音便の発生から語幹末母音との関連など興味深い点が多く見られる。天草版伊曾保物語においてもこのような現象があらわれているのかを以下考察していくことにする。

天草版伊曾保物語の動詞のうち、四段活用は異なり語数で九一語、延べ語数三〇一四語が用いられている。この四段活用を各活用形別にして示すと、次のようになる。

表1 四段活用の活用形別、音便形別語表

	未然	連用	終止	連体	已然	命令	イ音便	ウ音便	促音便	撥音便	全体
異語数	183	159	56	160	55	38	92	53	99	16	911
延語数	534	493	161	588	142	58	226	255	517	40	3014

$$\text{音便率} = \frac{\text{音便形延語数}}{\text{音便形延語数} + \text{連用形延語数}} \times 100$$

$$= \frac{1038 + 9}{1038 + 493 + 9} \times 100 = 67.9\%$$

この表のように音便形は異なり語数でイ音便九二語、ウ音便五三語、促音便九九語、撥音便一六語が用いられている。音便形の延べ語数二二六、二五五、五一七、四〇を合計すると、一〇三八語になり、これは四段活用全体の三四・四％である。これにナ変の撥音便九を加えて、音便形の延べ語数と連用形の非音便形に対する音便形の比率を出してみる。

つまり、音便形延べ語数一〇四七語は、原形と音便形延べ語数の合計である一五四〇語の六七・九％になる。天草版平家物語においても、七四・五％であるから、ほぼ大差はないようである。ここで平安時代の和文の音便率を見てみると、「伊勢物語」一・八七％、「枕草子」〇・九一％、「更級日記」二・六二％のようになっている。これらと比較してみても、天草版

表2 非音便形から「て・た」に続く語数

	サ行	タ行	マ行	バ行	合計
異語数	5	1	1	1	8
延語数	26	1	1	1	29

の音便率はかなり高くなっていることが分かる。音便率がこのように高い理由として、このころになると、助詞「て」や助動詞「た」に続く時、ほとんど音便形が使われるようになったためであると言われている。このことは天草版伊曾保物語においてはどうかを調べてみると、四段活用音便形のイ音便から撥音便までの一〇三八語は、そのほとんどが「て・た」に続いている。しかし、二例だけ例外が見られる。それはイ音便の「浮く」とウ音便の「沈む」である。その用例を示す。

互いに浮いつ、沈うづするところに（四二―一八）

このように「浮く」は「つ」に、「沈む」は「づ」に下接している。詳しくはイ音便やウ音便の項で述べることにする。

一方、非音便形から「て・た」に続く例は、八語二九回だけである。その八語二九回を行別に示すと次のようになる。さらにこの八語を連用形の用法と音便形の度数別にして示すと次の表のようになる。

表3 原形から「て・た」に続く語の連用形用法別語数

行	単語	中止	「てた」	イ音便	ウ音便	促音便	撥音便	合計
サ	伝申す		1					1
サ	伏す		1	2				3
サ	申す	2	19					21
サ	増す		1					1
サ	召す		3					3
タ	持つ		1			53		54
マ	羨む		1					1
バ	飛ぶ		1				2	3

以下各語について「て・た」に続いた非音便形及びその語の音便形の例をあげてみる。☆印は非音便形に、◆印は音便形に「て・た」のついた例である。

(一)伝申す

☆我この程名医に伝え申した事がある。（六七―七）

(二) 伏す

☆前後も知らず、酔い伏したところを(九六一―一)

◆その言葉に安堵して隠れ伏したところに、狩人来て(六四―一七)

◆ひたと倒れ伏いて、吐息をついては言うは(五〇一―一七)

(三) 申す

☆「ここに証跡がある」と申して(三三三―一〇)

☆智分の程のただ一人な事を申した(一七一―一六)

「申す」は「申し」が二回用いられているが、その内の一回が「て・た」に続いている。そのすべては、「申し」で「申した」の形で用いられ、音便形は用いられていない。

(四) 増す

☆山川には水嵩が増して(九七―五)

(五) 召す

☆イソボを召して(一六一―三)

☆かくてエチットの帝王国家の学匠を召して(四〇―一六)

(六) 持つ

☆我眼一つ持たれば(九四―八)

「持つ」が原形で「て・た」に付くのは、この一つだけで他の五三回は、促音便になっている。

◆或る百姓上々の熟柿を持って来て主人に捧ぐれば(一〇

一五)

◆しきりに乞いを受けて持った(二二―二四)

(七) 羨む

☆鳥これを羨みて(九〇―一六)

「羨む」には音便形はない。

(八) 飛ぶ

☆或る亀飛びたい心が付いて(八七―二三)

「飛びたい」は助動詞「たし」に続いたもので、この場合は音便形になることはまずない。それは現代語についても言える事である。他に撥音便形になっている用例は次の二例である。

◆鷲一つ飛んで来て(二五―一七)

◆羊の皮の上に飛んで来たによって(九〇―一七)

天草版平家物語では、サ行四段活用を中心に音便形がなかった語、原形と音便形の両方から「て・た」に続く語がある。しかし、天草版伊曾保物語においては、その傾向が平家物語ほど現われてはいない。これは語数の差もあると思われるが、伊曾保物語では、「て・た」に続く形が音便形に、固定してきていることを示していると思われる。また、平家物語には見えないタ行四段活用「持つ」に原形と音便形の両方から「て・た」に続く語が多く見られるが、これは原形一、促音便五三という数から見て音便形に移行している途中で、ほぼ完成していると思われる。また、天草版平

家物語には使用されていないバ行四段活用「飛ぶ」に原形に続く形一、撥音便二が見られる。しかし、先に述べたように原形に続く例は「飛びたい」となっており、これは音便形になることはない形である。

また、柳田征司氏は「室町時代の国語」において、原形であらわれる語を次のように定義している。

(1) 語幹末が長音 「申ス」

(2) 二音節動詞アクセント第一類の語 「押ス・貸ス・増ス」

(3) 使役性他動詞 「言ワス・立タス」

(4) 語幹末母音がへe 「消ス・召ス」

天草版伊曾保物語においても、「申す」は音便化していない。この事に関して、次のような説がある。それは「タオス」が長音形にならず、「タオイテ」となることから分かるように、イ音便は長音の後には続かない傾向がある。「申す」の場合、この現象とは逆で「[mC:]」が長音であるので、イ音便にはなりえない。なぜ「申す」が音便化しないのかについては、かなり難しい問題を含んでいると思われるので、ここではっきりとした結論は出す事はできない。

さらに音便を詳しく調べてみることにする。まず、イ音便であるが、イ音便をしている語は表4のように異なり語数九二語、延べ語数二二六語である。これを行別に分けて示すと次のようになる。

表4 イ音便の語数

	カ行	ガ行	サ行	計
異語数	40	5	46	92
延語数	111	14	101	226

いま、その用例を示すと、次のようになる。

サ行

その時イソポ文字の謂れを読み頭い

て申すは(一九一八)

いかにも打ち現われ喉笛を怒らかい

て(九九一二)

口を開くと共に肉塊をば落いた。

(五〇一二)

犬は眠りを覚いて忽ち狐に飛び掛っ

て(七七一一)

カ行

喜うで道を歩いた。(二三六)

シャントは大きに驚いて(一八一六)

かの勅使と連れてリヂヤの国へ赴いた。(二九一四)

今は既に齢も傾いて、齒も抜け(八五二二)

ガ行

口のあたりを嗅いでみれども(七〇二四)

「汝に負せた小麦一石急いで返せ」と催促したれども(四

四一七)

イ音便はこのように、下接する語はその多くは「て・た」であり、ガ行では連濁した語に続いて音便形を取っていることが分かる。ここで注意しておくべきことは、前述したようにイ音便では一例だけ「て・た」に続いていない「浮

表5 サ行四段イ音便語幹末母音別語数

イ音便形			非音便形	
母音	異語数	延語数	異語数	延語数
-a	28	57	12	30
-u	8	19	4	6
-e	1	1		
-o	9	24	3	4
全体	46	101	19	40

く」が使用されていることである。日葡辞書には〈v, u, p, a〉(ウキ、ク、イタ)と出ているようにイ音便形は「た」に下接している。また、用例にも〈Cocorono vta flo. (心の浮いた人)〉と出ている。この事から、一般的ではなくとも、口語ではこのような言い回しがあったのではないかと考えられる。天草版平家物語では、サ行四段活用を中心に音便形がなかった語、原形と音便形の両形から「て・た」に続く語があったようである。しかし、天草版伊曾保物語においては「伏す」にイ音便の例が二例見られるだけで、その他に両形の例は見られない。ここで、イ音便の中でもサ行四段活用について、その語幹末母音を分析してみることにする。

「て・た」に続くサ行四段活用の語幹末母音、例えば、「顕す・流す」は〈a〉、「隠す・許す」は〈u〉、「落す・直す」は〈o〉というように分けて、その母音と語数の関係を表にまとめると上記のようになる。この表を見ると分かるように、語幹末母音が広い母音である〈a〉の語が圧倒的に多い。これは語幹末母音が広い母音であるほど、音便が起きやすいということと一致している。さらにその所属語を母音別に分類して示すと次のようになる。

〈イ音便形の語幹末母音分類所属語〉

数字は延語数

*—aの語

あらわす(二)・いからかす(一)・いたす(三)・いだす(二)・かやす(二)・かわす(二)・けがす(二)・こころざす(一)・さす(五)・さたいたす(一)・さます(二)・つかわす(二)・さらす(一)・しゃめんいたす(一)・しんたいいたす(二)・だす(四)・ただす(一)・たぶらかす(一)・ながす(一)・にごらす(一)・はなす(二)・はたす(二)・めしいだす(一)・まわす(二)・もてなす(二)・もやす(二)・なす(二)・わたす(四)

以上二八語

*—uの語

かくす(一)・ぞんじつくす(一)・つくす(五)・つぶす(一)・とりはずす(二)・はずす(四)・ふす(二)・ゆるす(二)

以上八語

*—eの語

ひるがえす(二) 以上二語

*—oの語

おこす(二)・おとす(三)・おどす(一)・つかみごろす(一)・つきおとす(二)・なおす(一)・のこす(三)・もどす(一)・ごろす(二)

以上九語

語幹末が—aの「かやす」については「かえす」となっている例も見られる。「かやす」はイ音便が一例であり、「かえす」は未然形一、命令形一となっている。「返す」に二つの形が用いられていることの意味として、以前はeとiの母音連続になる「カエイテ」を避けるため、「カヤス」になっていたと考えられていた。しかし、室町時代に「カエイテ」という形は用いられていたことから、これは理由にはならない。柳田氏によると、これは語幹末母音が〈e〉であるからではなく、二音節動詞であったためであると考えられている。そして、eとiの母音連続を避ける傾向は江戸時代に入ってからあらわれてくるようである。次に原形の非音便形から「て・た」に続いた一九語を同じように語幹末母音によって分類すると次のようになる。

*—aの語

あらわす(一)・いだす(二)・だす(三)・さす(一〇)・さらす(一)・ただす(二)・たぶらかす(二)・つかわす(一)・ながす(二)・なす(六)・にこらす(一)・わたす(三) 以上一二語

*—uの語

かくす(一)・ゆるす(二)・つくす(二)・ふす(三)

以上四語

*—oの語

おとす(二)・ごろす(一)・なおす(一)

以上三語

このように音便形の語と非音便形の語の語幹末母音を比べてみると、語幹末母音が—aの語がイ音便形で異なり語数二八、延べ語数五七、非音便形で異なり語数一二、延べ語数三〇というように最も数が多い。そして、やはり広い母音である—aは音便化する傾向が強いことが分かる。次いで—oが多く音便化しており、イ音便形で異なり語数九、延べ語数二四、非音便形で異なり語数三、延べ語数四である。—uは、音便形八非音便形四で、延べ語数から見てみると、音便形一九、非音便形六となっている。これから見ても、音便形の割合は高くなっている。—eは「ひるがえす」の音便形一語一回だけで非音便形は見えない。つまり、イ音便形において言える事は、広い母音である—aや—o、

—uでは音便形が、多く用いられ、特に—eは音便率が低くなっている。そして、狭い母音である—iが語幹末母音になっている語は用いられていないようである。

それでは、カ行ガ行の語幹末母音はどのようになっているかを示すと次の表のようになる。カ行では—uの一七語

表6 カ行ガ行イ音便

母音	カ行	ガ行
—a	10	3
—i	3	
—u	17	1
—e	2	
—o	8	1
全体	40	5

がもっとも多く、「あるく(一)かたむく(一)まねく(一)」の音便形がある。—eでは「ちだめく(一)まねく(一)」の二語の音便形で—iでは「きく(一六)ひく(一)みきく(一)」に三語の音便形がある。また、ガ行では—iと—eの語はみられず、—aに「かぐ(一)さわぐ(三)」はぐ(五)」の三語の音便形がある。さらに—uでは「つぐ(二)」の一語が音便形で、—oにおいては「いそぐ(三)」の一語だけである。(数字は延べ語数)ここでカ行に注目してみると、天草版平家物語では、その一つである「行く」の多くは促音便だが、四例はイ音便になっている。

表7 ウ音便の行別語数

	ハ行	マ行	バ行	計
異語数	35	13	5	53
延語数	208	24	23	255

このような傾向について天草版伊曾保物語ではどうなっているかを見てみると、イ音便については「引いて」という用例が見られるが、促音便については、「引く」の複合語である「引き掛くる」において、促音便が「引っ掛くる」の一例だけが使われている。しかし、これは複合語であるため、促音便からは除くことにする。つまり、天草版平家物語のような傾向はここでは見られないということになる。

イ音便 ここでの番のこめに引いて (cite)
 行った犬どもが思うやうは(九七—一一)
 何と取り外いたか角を茂りに引っ掛け、(cite
 cadete) 抜き差しも叶わいで(六二—二三)

つづいてウ音便を見ていくことにする。ウ音便の行別語数を表に示すと次のようになる。

ウ音便では、ハ行・マ行・バ行の連用形が「て・た」に続く時、音便化している。その用例を次に示す。

ハ行 その時争うた人は問訊して
 (一八—二〇)

後を慕うて行く程に

(八二—一五)

案じ煩うて居らるる体を

(二六—一四)

マ行 シャント怪しうで言わるるは(二三一―二七)

七つの文字を刻うだ。(一九一―四)

親類を頼うで(二四一―六)

かの島を出るに臨うで(四一一―二二)

ハ行では「て・た」に下接した形になっているが、マ行では、「て・た」が「で・だ」と連濁した形で用いられている。

バ行 或る時イソボが主人旅をせらるるに及うで

(二二一―一四)

まだ糞土を運うだ事は無い。(六〇―一二)

犬を呼うで(二三―三)

バ行においてもマ行と同様に「で・だ」と連濁している。

ここで改めて表を見ると、天草版伊曾保物語のウ音便の異なり語数は五三語、延べ語数は二五五語である。いま、行別語数を見るとハ行の異なり語数は三五語、延べ語数が二〇八語とあり、圧倒的に多い。さらに、語幹末母音を調べてみると、表8のようになる。

この表を見ると分かるように、ハ行において―aの数が最も多く、次いで―oである。また、バ行に一語あるほかは、ハ行とマ行のどちらにも―eの語は使われていない。

表8 ウ音便 語幹末母音表

母音	ハ行	マ行	バ行
— a	24	6	
— i	1	3	
— u	1	1	
— e			1
— o	9	3	4
全体	35	13	5

さらに母音別に詳しく見てみることにする。―aのウ音便の用例を示す。

大きに笑うた。(Varōia) (一五―一一)

その時鳥類度々利を失うて。(vxinōte) (六〇―二〇)

蟬が来てこれを貰うた。(morōia) (六五―一四)

七つの文字を刻うだ。(qizōda) (一九―四)

このように―aのウ音便のへ〇へは開音になっており、長音で表されている。また、―oのウ音便を見ると、

請け負うた(vevōia) 事必定ぢや(四五―一一)

「やあ貴所は約束を忘れたか」と問うたれば(otāreba)のようにへ〇へは合音であり、やはり長音になっている。

次に―uのハ行ウ音便であるが、「食う(くう)」の一語一回のみである。

いぎこの柿を兩人して取り食うて(fohite) (一〇—
一一)

ここでは—uは長音で表されている。バ行については、—
eの一語は、次のように出ている。

大音を揚げて、喚き叫うで (segode) 戦うによって
(九九—一二)

このように—eでへ〇は合音になっている。さらにマ行
の語幹末母音—iの三語は「あやしむ・かなしむ・くるし
む」となっている。その用例を示す。

我が業ばかりで苦しうで (curxude) (七三—四)

このように—uは長音で表されている。つまり、—aのウ
音便におけるへ〇は開音となり、—oのウ音便における
へ〇は合音となる。—eのウ音便はへuで表され、長
音になる。そして、—iのウ音便もへuで表され、長音
になる。

音便形は「て・た」に続く形がほとんどであるが、その
例外として—uの「沈む」が用いられていることは先に述
べたとおりである。しかし、日葡辞書にはこのような表記
は見られない。

浮いつ沈うづ (xizuzuz) するとうらに (四二—一八)

「つ」に続く音便形の例は、天草版平家物語にも用いられ
ている。

泣いつわらうつせられた (三二四—一〇)

大塚光信氏の『クリシタン版「エソポのハブラス」私注』
によると、バ行・マ行の語で、そのb・mの直前の母音が
へa・o・e・iの場合、ウ長音便になるとある。

例 タノミタ↓タノウダ

サケビタ↓サケウダ

アヤシミタ↓アヤシウダ

さらに、uの場合はヌスミタ↓ヌスウダのように撥音便に
なる。しかし、大塚氏は「バ四マ四の音便形」(「国語国
文」第二十四卷)において、語幹の音節数の多いものは例
外的にウ音便になり得ると述べている。

「沈む」をこの例外に入れてよいか、問題が残る。

続いて、促音便について考察していくことにする。ここ
で「持ッ」の例を挙げてみる。へhot(he)で分かるよう
に、狭い母音であるへiが広い母音であるへoとへe
に挟まれているので、へiは発音しにくくなり、脱落が
生じる。このへiの脱落が生じやすい条件をまとめてみ
ると、

(1) 前後の子音が同一の破裂音(「持ッ」ではt—t)

(2) t・nに転じやすいr

(3) それだけで独立できるm・n(この場合母音は広くな
くてもよい。)

子音の連続を許さない日本語の中で、同一破裂音の連続が許されたのは、閉鎖したまま一拍休み、破裂させることで促音便化するようになっているようである。促音便においては、タ行・ラ行四段が「て・た」に続く場合とカ行四段「行く」の一語だけが「て・た」に続いて促音便化している。行と語数を示すと次のようになる。

表9 促音便の語数

	カ行	タ行	ラ行	計
異語数	1	4	93	98
延語数	19	61	436	516

ラ行四段からの促音便がもっとも多く、四段活用の異なり語数九一八語に対して、ラ行の九三語は一〇・一％である。また延べ語数で見ると四段活用の三〇二語に対して、ラ行は四三六語で一四・四％である。以下例を示す。

結句大きに嘲って先に行つたれば
(八〇一一)

狼やがてこの計略を悟って(五〇一一二)
掘って見るに、文字の如く、過分の黄金が見えた。(一九一一二)

ラ行の「あり」の促音便は天草版平家物語では「て・た」の他に、助動詞「つ」に続いた「あつ」の例があるが、天草版伊曾保物語において、「あり」はすべて「て・た」に続いて促音便になっている。

シャントという学匠があつたが(二三一一二)
「さらば答えい」とあつて(一五一八)

我が俣であつたれども(四七一四)
計られぬ事であつた。(五〇一一〇)

タ行四段活用の促音便は三語あり、そのうちの「持つ」は五三回使われているが、三八回は「以て」の形で用いられている。

ここに持つて参つたと言うて(三二一一二)
石を持つたも同前ぢや。(七九一一一)

タ行にはこの他に「打つ・立つ」が用いられている。
犬は打つても叩いても(二三一九)

忽ちそこを立つて去んだと申す。(六九一一三)
次にカ行であるが、カ行はその多くはイ音便になっている。しかし、「行く」には促音便の形がいくつも見られる。

「やあしたりや」と嘲って行つた。(yita)(五九一一六)
先に行つたれば(yitareba)(八〇一一二)

獅子王の所に行つて(yite)(八四一四)
さらに、この「行く」のイ音便の例も示す。

今二人を買い添えてサモと言う所へ行いた。
(yuita)(二三一一〇)

近い里に行いて(yuite)(六六一二二)
このように「行く」において、イ音便の場合は“yuite”

(行いて)の形になっており、促音便の場合は「yite」(行て)の形になっている。また、「行く」には「いて」の形が2例用いられている。

これはいづれも賞翫の物ぢや程に、持って行て

(yite) (二一—一)

つじめの如く行て (yite) 見れば (七八—二一)

つまり、「行く」には「ゆいた・ゆいて」「いった・いって」「いて」の三つの形があったということになる。日葡

辞書には <ti, u, ita> (いき・いく・いた) の形と <tu, d i, qu, ita> (ゆき・ゆく・ゆいた) の両形が示されている。

また、「いって」の促音脱落形である「いて」は「いいて」の短音化したものと思われる。「いいて」は「行く」のイ音便であり、ここでは同一母音の連続を生じている。これと同じような事が起こる「生く」が四段活用ではなく、音便を起こしにくい上二段活用に転じていることを考えあ

わせてみても、これらの形は具合が悪いものであることが分かる。しかし、「行く」が具合が悪くなるにもかかわらず、四段活用から上二段活用へ転じることが出来なかったのは「ユク」という形を持っていたためであり、それ故に促音便化したといえる。

八行四段の音便形はウ音便が多く、異なり語数三五語、延べ語数二〇八語であることは先に述べた。天草版平家物語においても八行四段の音便形はウ音便が殆どであるが、

「言ふ・従ふ・向かふ」の三語にウ音便と促音便が重なる形がある。天草版伊曾保物語では「追ふ」が「追っ掛け」という複合語で撥音便化している。しかし、複合語は音便形としては除外するため、天草版伊曾保物語では八行四段活用において、重なる形は見られないということになる。

撥音便はバ行・マ行四段活用が「て・た」に連なって用いられている。その語数を示すと次のようになる。マ行四段から撥音便している形がもっとも多く、「歩む・生む・汲む・沈む・済む・工む・謹しむ・積む・盗む・臨む・含む・踏む・休む」の一三語である。そのうちの二語、「沈む・臨む」は撥音便とウ音便の両形を持ち、その他は撥音便だけが用いられている。その二語の撥音便とウ音便の語数を示す。

表10 撥音便の語数

	バ 行	マ 行	計
異語数	3	13	16
延語数	4	36	40

表11 撥音便・ウ音便の両形を持つ語

	沈 む	臨 む
撥音便	1	1
ウ音便	1	4

両方の用例を示すと、次のようになる。

撥音便 不断常住酒に酔い沈んで

(yoizizunde) (九六一七)

ウ音便 互いに浮い、沈う (kizizuzu) するところに

(四二一一八)

撥音便 忽ち打擲しようとするに臨んで (nozode) (一

一一二)

ウ音便 かの島を出るに臨うで (nozode) (四一一二二)

狼餓に臨うで (nozode) そこへ来て言うは

(六六一五)

大事に臨うで (nozode) 見放さうする者と知音す

な (七一六)

成敗の場に引かるるに臨うで (nozode)

(七五一九)

用例を比べてみると、用法の違いはないようだが、マ行四段活用の音便形を取っている語を示してみる。

※ウ音便 数字は延べ語数。

怪しむ (一)・搔擗む (一)・悲しむ (二)・刻む (一)・

眩む (一)・苦しむ (三)・沈む (一)・頼む (四)・擗む

(三)・臨む (四)・飲む (一)・缺む (一)・孕む (一)

以上二三語二四回

※撥音便 数字は延べ語数。

歩む (二)・生む (二)・汲む (一)・沈む (一)・済む

(一)・工む (四)・謹む (四)・積む (二)・盗む (六)・

臨む (一)・含む (一〇)・踏む (一)・休む (一) 以上
一三語三六回

また、日葡辞書と比較してみると、撥音便をしている語は、「謹しむ・積む・盗む・含む・踏む・休む」の六語だけである。

ウ音便は異なり語数一三語、延べ語数二四語であり、撥音便は異なり語数一三語、延べ語数三六語となっている。さらに語数だけの表にして示すと次のようになる。

表12 マ行四段活用音便形の語幹末母音別語数

単語	母音	ウ音便	撥音便	単語	母音	ウ音便	撥音便
怪しむ	i	1		擗む	a	3	
生む	u		2	謹しむ	i		4
歩む	u		2	積む	u		2
搔擗む	a	1		盗む	u		6
悲しむ	i	2		臨む	o	4	1
汲む	u		1	含む	u		10
刻む	a	1		踏む	u		1
眩む	a	1		飲む	o	1	
苦しむ	i	3		缺む	a	1	
沈む	u	1		孕む	a	1	
済む	u		1	休む	u		1
工む	u		4				
頼む	o		4				

表13 マ行四段活用の語幹末母音別語数

母音	ウ音便		撥音便	
	異語数	延語数	異語数	延語数
- a	6	8		
- i	3	6	1	4
- u	1	1	11	31
- e				
- o	3	9	1	1
全体	13	24	13	36

音なる時—撥音便

[B] 語幹末がアエイオ列音なる時—ウ音便

の二法則が存在していた。しかし、その間にへゝ語幹一音節—特に母音音節である場合—はそれぞれの原則よりははずれ、撥音便となることもある。へゝ前項により語幹末ウ列音語でウ音便となるものはほとんど語幹二音節以上の語である。

の二傾向も存し、それは抄物よりキリシタン物において著しかった。

この事について、天草版伊曾保物語ではどのようになってくるかをさらに詳しく考察してみる。

マ行四段活用のうち、音便形を持つ語とその語幹末母音

すでに、ウ音便

の項目で触れているが、バ行マ行の四段活用の撥音便とウ音便について、大塚光信氏は「バ四マ四の音便形」(「国語国文第二十四巻第三号」)で次のような法則を示している。

[A] 語幹末がウ列

を示すと表12のようになる。

表14 バ行四段活用音便形の語幹末母音別語数

単語	母音	ウ音便	撥音便
及	o	12	
叫	e	1	
飛	o		2
跳	o		1
運	o	1	
結	u		1
呼	o	3	
喜	o	6	

[A]の「語幹末母音がウ列音の時は、撥音便」であるが、—uにおける撥音便の異なり語数は一語、延べ語数は三語になっている。一方、ウ音便は異なり語数一語、延べ語数一語と完全に法則の通りではない。これは、ウ音便の項目でも挙げた「沈む」である。また、[B]の「語幹末がアエイ

オ列音になる時、ウ音便—は—aに関しては必ずしもそうではない。まず、—iではウ音便は、延べ語数六語で「怪しむ・悲しむ・苦しむ」の三語である。また、撥音便は、延べ語数四語で「謹しむ」の一語だけである。つまり、語幹末が—iでありながら、「謹しむ」は撥音便になっている。その用例を挙げる。

吃り吃り謹んで申すは(二二—一三三)

その時イソボ叡慮を察して謹んで(二九—一二一)

鼠もそこで大きに肝を消し、謹んで申したは(五二—一三三)

表15 バ行四段活用の語幹末母音別語数

母音	ウ音便		撥音便	
	異語数	延語数	異語数	延語数
-a				
-i				
-u			1	1
-e	1	1		
-o	4	22	2	3
合計	5	23	3	4

狐謹んで（五〇二—一六）
次に—oであるが、ウ音便は「頼む・臨む・飲む」の三語で、延べ語数九語になっている。また、撥音便は「臨む」の一語である。この「臨む」はウ音便の項目で挙げたように、「沈む」とともにウ音便と撥音便の両形を持つ語である。
忽ち打擲しようとするに臨んで（一一—一二）
語幹一音節語は撥音便になると大塚氏は述べているが、「つつしむ」「のぞむ」はこの説から外れている。大塚氏によると、バ行四段活用のウ音便と撥音便においても同様のことが言えるはずである。バ行四段活用のウ音便と撥音便の語幹末母音別の語数を示すと、表のようになる。

表を見ると、—uの

「結ぶ」の撥音便と—eの「叫ぶ」のウ音便は大塚氏の説から外れていない。—oにおいても「及ぶ・運ぶ・呼ぶ・喜ぶ」の四語で延べ語数二二語のウ音便となっており、外れていない。しかし、「飛

ぶ・跳ぶ」の二語、延べ語数三語が撥音便となっている。その用例を示す。

羊の皮の上に飛んで来たによって（九〇—七）

狐跳んで井桁の中に跳び上って（九一—一）

「飛んで」が二回、「跳んで」が一回用いられており、いずれも語幹が一音節語であるから、大塚氏の説を外れてはいない。

参考文献

「天草版伊曾保物語」 井上 章 風間出版

昭和三九・二・二五

「天草版平家物語対照本文及び総索引」 江口 正弘
明治書院

昭和六一・一一・二〇

「国語学大辞典」 国語学会編

東京堂出版

昭和五五・九・三〇

「クリンタン版『エソポのハプラス』私注」 大塚 光信

臨川書店

昭和五八・三・一〇

「日本古典全集 吉利支丹文学集 下」 新村 出・

柘 源一 校注

朝日新聞社 昭和四二・二・二八

「室町時代の国語」 柳田 征司 東京堂出版

昭和六〇・九・二五

「日本古典文学大系 仮名草子集」 前田金五郎・

森田 武 校注

岩波書店 昭和四〇・五・六

「国語史辞典」 林 巨樹・池上 秋彦 編

東京堂出版

昭和五四・九・二五

「バ四マ四の音便形」 大塚 光信 国語国文 第二十

四卷第三号

昭和三〇・三

「国語史の諸問題」 濱田 敦 和泉書院

昭和六一・五・二二

「邦訳日葡辞典」 土井 忠生・森田 武・長南 実

編訳 岩波書院

昭和五五・五・二九

「天草版平家物語の動詞の音便形について」 江口 正弘

熊本女子大学学術紀要別刷 第二十四卷